

博士学位論文審査要旨

2021年1月8日

論文題目： 中国人留学生における親密圏の変容

学位申請者： 李文

審査委員：

主査： 社会学研究科 教授 鶴飼 孝造

副査： 社会学研究科 教授 尾嶋 史章

副査： 社会学研究科 教授 小林 久高

要旨：

この論文は、日本に留学している中国人学生を対象に、異文化適応およびパーソナル・ネットワークについて4次のインタビュー調査(計38名)と4次の質問紙調査(計912票)を実施し、1990年代から2010年代にかけて、中国人留学生の「家族や友人との持続的な関係性(親密圏)」がどのように変わったかを分析しようとするものである(序章)。

本論文は大きく二つの部分から構成される。第一部では、従来の留学生研究における中心的なパースペクティブである異文化適応の視点から留学生の親密圏をとらえようとする。まず90年代と10年代の留学生の親密圏を比較し(第2章)、次いで留学生が日本人学生と友人になる上でどのような文化的障壁があるかを分析し(第3章)、さらに日中の各学生がもつナショナリズムが交友関係にどのような影響を与えているかについて考察を進めている(第4章)。

第一部で明らかになったことは、90年代の留学生の多くが20代後半以上で社会経験も有し日本社会に適応するために日本人の友人との関係を活かしていたのに対して、10年代の留学生はインターネットやSNSの普及もあって必ずしも日本人学生のサポートを必要としない反面、日本人学生との交友に不満を感じるが増え、両国の政治外交関係やナショナリズムの影響を強く受けやすくなっている点である。そこから従来のホスト国における「適応」の視点だけでは現在の留学生の親密圏を十分にとらえられないことがわかった。

第二部においては国境を越えた「文化圏」における中国人留学生のパーソナル・ネットワークの分析を主軸にすることによって第一部の限界を乗り越えようとする。まず両文化へのつながりが留学生活への満足感のために必要であることをおさえた上で(第5章)、微信などの中国語SNSの発達によって中国本土にいる家族や友人とのコミュニケーションが急増して閉鎖性を強めていることを示し(第6章)、一人っ子が多い現在の留学生は結婚や進路に関して中国本土にいる親の価値観の影響を強く受けるようになった実態を明らかにしている(第7章)。

中国の経済発展と中間層の発達の中で私費留学が増大する一方、親は伝統的な価値や文化を一人っ子である自分の子どもに守らせたい。中国の若者たちはグローバル化の波に乗って海外に留学する反面、留学先で異文化への理解を深めて交友の幅を広げる機会を失いがちであることを本論文はパーソナル・ネットワーク分析の手法を用いて描き出している。これが世界各国で学ぶ中国人留学生に共通の現象なのか、あるいは日本における留学生に特徴的なことなのかさらなる検討を要するし、多くのデータの分析を一層深めることも求められる。しかし、質的量的な調査方法を駆使して、留学生研究に新しい貢献を成し遂げたことは高く評価できる。

よって、本論文は、博士(社会学)(同志社大学)の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2021年1月8日

論文題目： 中国人留学生における親密圏の変容

学位申請者： 李 文

審査委員：

主 査： 社会学研究科 教授 鵜飼 孝造

副 査： 社会学研究科 教授 尾鳴 史章

副 査： 社会学研究科 教授 小林 久高

要 旨：

2021年1月4日(月曜日)午後1時より午後2時10分まで、公開学術講演会をオンラインで開催した。また同日午後2時15分より2時45分まで語学試験(英語)を、午後2時50分から3時30分まで口頭試問をオンラインで実施した。

公開学術講演会では、審査委員3名を含む一般参加者のまえて、提出された博士論文について論理的に説明することができた。また参加者からの質疑応答の時間においても明快に適切かつ丁寧に各質問に回答することができた。口頭試問では、専門分野(社会学)において、博士学位取得者に相応しい能力と知識を有していることが確認された。語学試験においても、博士学位取得者に相応しい能力を有していることが確認された。

以上のことから、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 中国人留学生における親密圏の変容

氏名： 李文

要旨：

現在の中国人留学生が抱える問題の解明には、従来のような異文化適応の視点だけでは不十分であり、彼らのパーソナル・ネットワークを分析の中心に据える必要がある。そして、デジタル世代の(主に 2010 年代以降日本にいる第三世代の)中国人留学生を対象に分析する場合、彼らの親密圏を構成する「家族」と「中国人友人」そして「日本人友人」とのネットワークは、以前と比べてその構造を大きく変化させている。本研究の目的は、そのような中国人留学生の親密圏の変容を実証的に明らかにすることである(序章)。

第2章では、1990年代の元中国人留学生と2010年代以降の中国人留学生を対象とした半構造化インタビュー調査Ⅰ・Ⅱにもとづく分析によって、まず第二世代と第三世代の中国人留学生の親密圏の概要を把握した。連絡頻度やサポートネットワークの重要性からみると、1990年代の第二世代の元中国人留学生が親密圏の中心を日本人友人とのネットワークにおき、「生活圏中心」の親密圏を構成していたことがわかった。それに対して、第三世代の中国人留学生は、母国の SNS である微信を頻繁に利用することによって、母国の家族や友人さらには日本にいる中国人友人と積極的に連絡をとる反面、日本人社会に溶け込みにくくなる傾向がみられる。彼らが中国語 SNS を利用できるようになったことで成立した「自文化圏中心」の親密圏は、彼らの日本人との友人形成や異文化コミュニケーションの壁になっていることが示された。

第3章では、なぜ中国人留学生が日本人学生と友人となりにくいのかについて、中国人留学生を対象としたインタビュー調査Ⅲと、日本人学生を対象としたインタビュー調査Ⅳを通して分析をさらに深めた。中国人留学生へのインタビューによれば、まず日本人学生と交友を深める機会が少ないこと、日本人の集団主義による排他性、日本人とコミュニケーションをするハードルが高いこと、日中の社交文化の違い、日本人の外国人留学生に対する消極的な態度や「欧米志向」などが挙げられた。日本人学生に対するインタビューの結果からも、中国人留学生が感じている交友の難点が概ね確認された。

第4章では、日中学生を対象としたインタビュー調査Ⅲ・Ⅳ、アンケート調査Ⅲ・Ⅳの結果を分析した。中国人留学生が日本人の中国に対する否定的なナショナリズム意識に遭遇し、自分のナショナリズム意識も強まったこと、他方、日本人学生がもつ中国への否定的なナショナリズム意識は、主に日本のマスコミによるネガティブな報道によるものであることが明らかとなった。量的アプローチからは、日本人学生が中国人と友人になろうとする意欲は、彼らの政治的背景である中国・中国人に対するイメージ、彼らの身近な経験である中国人留学生の友人の数と中国人留学生に対するイメージ、そして彼らのグローバル度を反映する英語の能力に影響されることがわかった。

以上、第一部全体の分析結果から明らかになったことは、中国人留学生と日本人学生の間には社交文化の違い等があるものの、そのような意識の隔たりは互いの生活環境の変化やメディアのあり方に大きな影響を受けており、必ずしも異文化適応の問題ではないということである。

そこで第二部では意識よりも関係に焦点をあてて、中国人留学生のパーソナル・ネットワークを中心に分析し、より構造的な変容を分析することで問題の原因を解明する。

第5章では、中国人留学生に対するインタビュー調査Ⅱによって、彼らが主に微信を利用することから中国人友人とのネットワークに偏りがちになると、異文化コミュニケーションを十分に

できず、留学の本来の目的を達成できない不満につながっていることがわかった。

次にアンケート調査Ⅰによれば、中国にいる家族や中国人友人が彼らの精神的サポートとして重要な役割を果たす一方、「日本人」に対するイメージが「日本」より比較的低く、中国人留学生が日本人と親密なネットワークを形成し異文化コミュニケーションを行なうことに困難を感じていることが裏付けられた。

またアンケート調査Ⅲで友人ネットワークを調査したところ、日本人友人との連絡頻度が最も低いという結果が出た。しかし「日本人友人との連絡の頻度」が高ければ高いほど、「日本人とのコミュニケーションに対する満足感」が高い傾向も分かった。日本人友人を中心とした「生活圏中心」の親密圏を併せもつことによって、中国人留学生の日本社会への適応にポジティブな影響を与えることが計量分析でも明らかになった。それとは対照的に、「母国の友人との連絡頻度」が高ければ高いほど「日本人とのコミュニケーションに対する満足感」が低くなった。日本人友人から離れた「自文化圏中心」の親密圏が優勢になると、中国人留学生の日本社会への異文化適応にネガティブな影響を与えることがわかった。

第6章では、アンケート調査Ⅲにおける SNS 利用の分析を通して、中国人留学生にとっての「磁場」である中国語 SNS の微信が、母国にいる家族や中国人友人と情報共有・交換そして連絡を便利にする一方、日本人友人とのコミュニケーションにネガティブな影響を及ぼす壁になっていることがわかった。中国人留学生が微信を中心に利用することで家族や中国人友人の「自文化中心」の親密圏ができあがっていること (SNS 社会での日本人離れ) が再確認できた。

第7章では、アンケート調査Ⅲから中国人留学生が微信を最もよく使う理由は、親と連絡するためであることがまず示される。彼らは、海外にいても中国の家族と頻繁にコミュニケーションをとり、家族と同じ価値観をもつことが求められる。留学生にとって親や家族は大切なサポート・ネットワークであると同時に、彼らに大きな期待を寄せ、プレッシャーを感じさせているようである。また高学歴な親ほど子どもの就職にも強い影響をおよぼしている。

インタビュー調査Ⅰの分析によっても、中国にいる家族は留学生の最も重要な準拠集団として強い規範を押し付け、「進学・恋愛・結婚・出産」という人生の大事なイベントにおいて親の意思に従わせている実態がわかった。中国人留学生は、家族の養老問題についても強い責任感をもつことが求められ、留学中の勉学に十分に専念できない。このように、中国における共同体としての家族が、留学生の自文化中心の親密圏をさらに強化していることが明らかになった。

終章では、中国社会の大きな変動や中国語 SNS の拡大が中国人留学生の親密圏の変容を促し、異文化コミュニケーションにマイナスの影響を与えていることを理解して、留学生を受け入れる日本の大学に、交友や異文化適応のネットワークの磁場としてのはたらきを強化する政策が求められることを提案した。